
世界創世ゲーム

八七八 九々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界創世ゲーム

【Nコード】

N2434Y

【作者名】

八七八 九々

【あらすじ】

神様になりませんか？

今話題のオンラインゲームの売り言葉だ。

プレイヤーは神となって、まだ言葉さえ知らないAI達を導いてゆくのだという。

発表前からクソゲーだ神ゲーだと言われたこの作品が、遂にリリース！ さあ、諸君らも神となって、人類を導き給え

プロローグ（前書き）

見切り発車 完結未定 時々更新

ブローグ

今アナタの手によって世界は創造される……。

Genesis Onlineへようこそ！ ゲネシスオンライン

インはアナタの手によって、世界を、人を創造し、導いてゆく世界初の国家主導

MMOSLGです！

Genesis Onlineって？

Genesis Onlineは神によって天地創造された世界を、アナタが神の石柱となって人間を導いてゆく、従来のゲームを超えた新感覚次世代SLGです。

従来の規制されたAIの枷を取り除いたキャラクター達は、導き手であるあなた達でさえ驚くような進化をみせることでしょう。

さあ、あなたも人間を導いて世界を創造してみませんか？

登録は下のボタンをクリック

「マキ、このゲームどう思う？」

照明の落とされた薄暗い部屋のなか、ぼんやりと青白の光りが部屋を鈍く照らしている。

PCの前には影、時よりフラフラと揺れるかと思えば、部屋の中にカチカチと音が響く。

ジジジジと思いだしたかのように唸る黒い箱は、今の時代のそれと比べると比較にならないほどに大きく、古めかしかった。

「何がだよ」

影に答えたのは、同じく影だった。

影の背後で答えた影は、今より数十年ほど前、突如として青少年の心を”萌”という新文化で掴んだ給仕服メイドを着ていた。萌えという言葉は当時から三十年が過ぎた今もまだ現役である。

「いや、面白いのかなって」

影はそう言った。その言葉には感情が一切伺えない。

「そんなの知るか……。わかったよ、調べればいいのか？」

うって変わって、答えるメイド服姿の影は存在な言葉ながらも、そう答えた。

「ああ、頼む」

影はそれだけを言うと、再び画面に視線を落とした。

「へえ、面白そうじゃないか」

「どうなされました？ お坊ちゃま」

豪華絢爛。この部屋を一言で表すならばこれに尽きるだろう。

畳二十畳はある部屋に、歩けば沈み込むような絨毯が敷かれ、中央壁よりには天蓋付きベッドがその存在を誇示している。

その反対側に置かれた凝った装飾の机と椅子。そこに腰掛けて目の前に浮かぶ画面を操作するのは、部屋と同じく、それ以上に高貴さを持った少年だった。

「ああ、爺やか。いやね、前々から話題になっていたゲームが、遂に一般に開放されるらしくて」

「ほう、ゲームといいますと。あれですか？ 国が科学者と一緒に研究していたという。確か、人類の進化をもう一度仮想世界でやり直すとか」

背後に控えていた初老の男がそう言った。男の出で立ちは黒の燕尾服と、まさに執事であった。

「そう、発表された当時は何を馬鹿なっただけだ。でもこれを見るとね」

そう言つて少年は画面を指でなぞつた。なぞつた文字が大きく表示される。

「AIの規制を取り除くですか。やれやれ、我々AIとしては根底を損なわれるような事ですな。ですがこれなら確かにAIを人間と同様の進化をさせることができるかもしれません」

ロボット三原則

第一条 ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。

第二条 ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければならない。ただし、あたえられた命令が、第一条に反する場合は、この限りでない。

第三条 ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない。

これらを根幹とし、その他にも百八つの法則を載せたのが今の A I の行動原理となっている。

その他にも危険地帯や介護など用途によって法則が変わったり、増えたりしてはいるものの、この三原則と百八つの法則は全ての A I に適応されている。

また、三原則が陽電子頭脳の設計理論の根幹を成しているため、新たに A I を創り上げる事は多大な労力と期間を要する事になり事実上不可能に近いとさえ言われている。

「A I はロボット三原則が無い限り機能しない。あり得ないはずなんだけどね」

「だから面白そうだと？」

「そう、確かに A I の枷ともいえるロボット三原則を撤去してしまえば、原始時代から現代、もしくはさらに未来にまで A I の独自文化で発展し、それを観察出来るかもしれない。だけど」

「我々 A I はロボット三原則が無いと動かないし、動かせない」

うん　と少年は頷いた。

「面白そうだと思わないかい？　それに、どうやら僕達人類と同じ歴史を歩ませるつもりは無いようだ」

「と、言いますと？」

少年は答えるかわりに画面に触れて、スクロールさせる。何度かの操作の後画面に表示された文字を爺と呼ばれた執事に見せた。

” 剣と魔法の世界で、神様のお導きをお待ち申し上げます ”

少年は笑みを見せる。

「魔法なんて、ドキドキするだろ！？」

滅多に見ることのない少年の純粋な笑みに、爺も笑みを浮かべた。「坊ちゃん御心のままに。私は情報を集めることと致しましょう」

ゲネシスオンライン グランドオープンまで あと一ヶ月

ブローグ（後書き）

ロボット三原則 設計理論の根源等 アイザック・アシモフ 引用

創世記 0（前書き）

未だ物語は始まらず

創世記 0

Genesis Onlineはあつという間に世間の話題の中心となった。

人工知能を持ったアンドロイドが一般的になり、人間の仕事は徐々に無くなっていった事によって空いた時間。つまり人類は娯楽を要していた。

そんな折に発表されたこのゲームは、プレイに底がない事、今もってゲーム自体に謎が多いこと、そして神となってAIを導くと言う売り文句にあつという間に世間の注目の的となったのだつた。

世間一般的に神ゲーだとも、クソゲーだとも言われるようになったこのゲームは、色々な意味を持つてして、世間に注目されることとなつていた。

もしかすると、その中には己等による地球環境破壊とそれによるシエルター生活を余儀なくされた今の生活を、せめてゲームの中では回避したいという想いが少なからずあつたのかもしれない。

人が一歩も出ることを許されないシエルターの外の世界。その環境回復の仕事も、今ではロボットが行なっている。

「マキ、確か情報ではサーバーは確かジェノア社のメインサーバーを使うと言っていたな。どうやら予想していた以上にプレイヤーが多くなりそうだが、大丈夫なのか？」

仄暗い暗闇の中、影が己のガイノイドに問いた。

「んー大丈夫だろ。実質このシエルターを管理している連中だ。お飾りの政府と違って、やつらは抜け目がないからな。予想の範疇だろうよ。それに、今の世界人口全員が同時にアクセスしたって、問題ないだろうさ」

先の大戦と、戦争による地球汚染によって、人類の数は激減した。今シエルターに避難している約四千万の人間が世界の人口なのか、他の地にまだ生き残りがいるのか。それすら分かっていない。その為、このシエルターに住む人々は、世界人口を四千万人とした。また、AIを持つロボット アンドロイドが創られた主な理由として、地球環境の回復と、生存者の確認が第一級優先事項とされている。

「何故か今週に入って、ゲームの情報が公の場にやたらと目にするようになったのだが、ジェノア社が操作している可能性は？」

発見した時はまだ殆ど知られていなかったゲネシスオンラインだったが、ここ一週間ほどで突如としてインターネット上の至る所で耳にするようになった。

自然と広まったと考えられなくもないが、それよりも誰かが意図的に情報を流していると考えたほうが自然だ。

「無い……とはいえない。寧ろ可能性としては高いだろうな。だが違うと思う」

ほう、と己のAIのぱつとしない回答に、影は多少の表情を見せた。

「その心は？」

「私の勘だ」

AIはそう答えた。

「え、なにそれ？」

萩村修一は友人の問を疑問で返した。

「お前知らねえの！？ ゲネシスオンラインだったら今ネットで話題のオンラインゲームじゃん」

中、高等学校の授業が実質ほぼ自宅学習と通信教育になった現代において、高等学校一回生である萩村修一がこうして学校で友人と会うのはおおよそ一ヶ月ぶりの事になる。

勿論学校以外で会うこともあるのだが、教室の中で会うのは月に一度の出席日ではない。現代においての学業も、殆どがアンドロイド任せなのが現状だった。

「いや、全く」

修一は普段家にいる時もあまりネットを多用しない。家が古書庫を営む故か、電子書籍よりも紙媒体を好む修一は、同じく学業以外ではPCを殆ど使用しない、電子文化の進む現代において、化石とっていいレベルの人間だった。

修一の言葉に友人である中野湊は嘆息した。

「おまえ……もう少し情報に気にしたらどうだ？ それだと話についていけないだろ。色々」

「いや、別に特に困らないし。新聞とってるから」

「新聞って言ったって、源田の爺さんがほぼ趣味で作ってるようなもんじゃねえか！それに内容だって近所の野良猫と犬が喧嘩したとか、嫁さんが夢枕に立ったとか、どうでも良いような事ばっかだし」

源田の爺さんとは、湊の住むマンションの隣に一軒家で住む変わった爺さんの事だ。家の一階部分は印刷所となっていて、そこで毎日新聞を作っている。もっぱら購読者は萩村家しかないのだが。

ちなみに、現代の新聞に当たるものは、毎日携帯端末に自動配信される。紙媒体はとうの昔に廃れている。

「いやいや、天気予報は当たるんだよ？」

「そらシエルターの中じゃ天気は管理されてるからな。今日が金曜日だから、明日の朝には来週一週間の分刻みで詳細な天気が発表されてるだろうさ！」

あ、そうか。と今合点がいったかのような態度に、湊は再びため息をついた。

「まあいい、それでさっきの話だが、最近話題になっているゲームがあるんだ。それがゲネシスオンラインなんだが。まあこれを見るよ」

そうやって湊はポケットから携帯端末を取り出し操作すると、空中に映像画面が浮かび上がった。湊はそのまま画面を指でなぞるように操作していくと、暫くして修一に見えるようディスプレイを動かした。

「ほれ、これがそのゲームの公式サイトだ」

湊が見せた画面には、大きくGenesis Onlineの文字に、神々しさを描こうとして歪さを増した神のイラスト、どこことなく陳腐さとバランスの悪さを感じるHPだった。

「これ？」

「これ」

修一の問に同じ言葉で返す湊。修一にとってみれば、これの何処に話題性が有るのが分からなかった。それを見て取ったのか湊が言葉を続けた。

「このゲームが話題を呼んだ理由ってのが、ほらここ」そう言っ指で画面をスライドさせていく。

「ほら、これ」

湊の指差す先にあったのは 国営の文字。

「国営？ まあ確かに国営のゲームってのは珍しいよね。注目を集めるのも分かるかも」

「いや、そこじゃねえよ。その隣」

まだ何かあるのかと首を捻りながらも修一は続けて画面に視線を向ける。

「あー、なるほど。ジェノ研が嚙んでるのか」

ジェノア社と言えば、実質このシエルターを管理、支配している企業である。と言うよりも、シエルターの中にある企業全てがジェノア社の子会社や関連会社なのだ。先の大戦後の混乱期、日本国政府が機能しなくなった時、成り代わって治政を行ったのが企業と地方自治であった。

ジェノア社はその混乱期中、地方に土地を買い、自社の周りに子会社を集めて一つの企業都市とした。それが今のシエルターの前身である。

その後環境悪化の為に避難してきた人々を受け入れ、巨大都市国家となったジェノア社は、環境汚染と共にシエルターとして機能を始

め、外界と完全に関係を断つたのだった。

外界からの汚染を防ぐためにシールドを開発し、都市全てをシエルターとしたのも、環境回復の為にAIを創り上げたのもジェノアのとんでも科学者達だった。

正式名称ジェノア科学研究所、略してジェノ研。そのとんでも科学を次々と開発、発表してきた連中が新たに打ち出したゲーム。その為人々は期待したのだ。

”ジェノ研の手がけるゲームが普通のはずがない！”

ようやく合点がいった修一だった。

その後の湊の話を要約するところだ。

”一緒にゲネオンやろうぜ！”

要するに湊は修一と一緒にゲームをしたかったようだ。ちなみにゲネオンとはゲネシスオンラインの略称である。

湊の要求に一言了承の言葉を交わすと、友人は満足したようで自分の席に帰っていった。丁度担任が教室に入ってきたのだ。

担任のゴリラ、もとい、呉織いおり先生の確認事項、その後の一人ひとりの面談を受け、修一は帰宅の途についた。

創世記 1（前書き）

ゲームスタート？

創世記 1

光りあれ

こうして、光があつた。

とはいかないものの、波乱万丈のゲーム開始から今で十分ほど。

修一がゲームの”中”に入った時には既に天地創造は完了していた。既に第六の日まで、運営という名の世界創造神によって世界は創られていたようだ。

修一達プレイヤーはこれから神の一柱として、プレイヤー自身を神と信仰する人間たちを創らなければならない。

世界滅亡まで、プレイヤーが創造した人間の一族を生き長らえさせること。ゲームに入る前、少女から受けたこのゲームの説明は、たったこれだけだった。

修一の家には荷物が届いたのは、湊にゲネシスオンラインを薦められてから二日後の事だった。

荷物が来てるわよー。と母親に呼ばれたものの、心当たりの無かった修一は首を傾げながらも荷物を受け取った。差し出し先はジェノア科学研究所。ピンときた修一はおもむろに携帯端末を取り出した。

「コール、中野湊」

携帯端末が自動的にコールを開始する。

「おう、どうした修一」

数コールの後、端末から間延びした声が聞こえた。

「さっきジエノ研から荷物が送られてきたんだけど」

「おお、来たのか。中は開けたか？」

「いや、まだ」

「何故開けない！ 早く開けろ、今直ぐ開けろ、そら！ 今だ！」

「……わかったよ、だからちよつと待て」

あまり急かすなと言、修一は受け取った荷物を開けに掛かった。

配達用の箱というものは早々変わらないものなのか、今も昔も箱の素材はダンボールだった。多少雨に強くなったり、強度が上がったりはしているものの、人口の最も多かった時期と比べても、そう変わりはない。

そう言えば、昔はガムテープなるもので一々止めなければならなかったと聞いたことがある。

今のダンボールは当時と違って、強度の高い蓋が付いているので開け閉めも楽でいい。一度閉めてしまえば正しい手順でないと開けにくい仕様なのだ。勿論素材がダンボールなため、強引に引きちぎれば開けることは出来るのだが。

父に聞いたことをぼんやりと考えながら修一は封を剥がし、開けていく。と、中から白い緩衝材に包まれた何やらゴツイ物体が現れた。

箱の中から取り出す。

「なんだこれ？」

出てきたものをみて、修一は呟いた。

「お、開けたか。きつとお前の事だからVHMDなんか持っていない
と思ってな。注文しておいた」

バーチャルヘッドマウントディスプレイ

箱の中に入っていたのは、一見サンバイザーにも見えなくもない物体だった。だがサンバイザーと違って分厚く、脇からコードが生

えている。　どうやら頭に被って使うものらしい。被れば厚い部分は目の位置に来る。

「注文って、お金　」

「金是要らないぞ。　どうやら今回は国……　とうかジェノ研の研究目的が強いらしくてな。　V H M Dは研究参加者に無償で配っているらしい。　それが今お前の持っているやつだ。　ちなみにゲームも基本無料だ」

「それはなんともまあ、　太っ腹なことだ」

「だな、　発売日に並んで買った俺に謝れ！」

そう言えば湊は何時だったか深夜に並んでゲームを買ったと言っていたことがある。　きつとその時にこのV H M Dを買ったのだろう。　「しかも俺の買った奴より反応速度も接続速度も上がっているときやがる。　読み込みだって確か随分と早くなっているはずだし、　軽量化もされているとか。　羨ましすぎるぜ。　そもそもだなV H M Dと同じ機能を持つゲーム機自体は二十年も前にはあったんだ。　当時はエッグカプセルといって卵型の大きなカプセル状だったらしい、　その中に入って遊んだんだ。　当時人気だったのがロボットを操って戦うゲームで、　大きな大会も開催されたとか。　でだなあ　」

湊がゲームについて語り出せば一日かかってでも終わらない。

「でもさ、　このV H M Dって無料なんだろう？　　なら今からも一つ頼めばいいじゃん」

「……あ」

湊曰く、　ゲーム内では自身がアバターとなつて、　実際にその場所にいるように感じるらしい。　まだゲネシスオンラインがどのようなゲームか分かっていないが、　少なくとも今までリリースされてきたゲームではそうらしい。

取り敢えずは中で会う為にと、湊が名付けるであろうアバターの名前を聞いて、会話を終了した。当日はこちらから湊を呼び出す事になる。

ゲームが始まる正午、修一はVHMDを被ると、こめかみ部に造られたコネクトボタンを起動させた。

電撃が身体を突き抜ける。目の前が虹色の閃光に包まれ、暗転。身体が回転し、加速する。あつという間に修一の身体は引き伸ばされ、細い線となって、闇の奥底へと落ちてゆく。

洗濯機の中にと、きつとこんな感覚だろう。修一の初めてのDIVEの感想だった。吐き気を催しうずくまる。そうして気がついた、うずくまった修一の両手の感触は、何時もの自分の部屋の柔らかなカーペットとは違い、冷たく硬い。修一は石畳の上にうずくまっていた。

「ここは？」

立ち上がって辺りを見渡す。辺りには幾つもの石柱が建っていた。形やデザインからして何処と無くパルテノン神殿を思い浮かべせる造形をしている。だが相当古いものなのか屋根は既にほぼ残っておらず、屋根の変わりに雲ひとつ無い蒼穹が広がっている。

神殿の外はと視線を伸ばしてみれば、その先に見えるのは雲雲雲、白い雲海が広がっている。どうやら相当高い位置に自分はいるようだと思っただと修一は思った。

「ようこそゲネシスオンラインへ」

辺りを伺っていた修一に突如として声がかけられた。驚いて振り返った。

そこには、いつの間に現れたのか背中に白い羽を生やし、薄く金色に光る輪っかを頭に浮かべた、だが何故か髪の毛が黒で、容姿も日本人といったアンバランスな天使？ が笑みを浮かべてそこに居た。

「いや、そこは統一しようよ」

思わず突っ込む。第一声が予想外の突っ込みだったからか、天使は愕然とすると、今度はオロオロと狼狽しだした。

「え、だ、だってこれ可愛くないですか！？ 私この羽根と輪っか付けたくて今日を楽しみにしてたんですよ！」

「いや、可愛いとは思っけど……」

そう、どちらも可愛いとは思うのだ。天使の羽や輪っかだってアングロサクソン系の少女が付ければその子の可愛らしさをもっと引き出す事だろうし、黒髪の少女だって現実では中々お目にかかれないうような美少女だ。着物を着せればさぞかしその黒髪が映える事だろう。

だがあくまで日本人顔である彼女に天使の羽と輪っかは似合っているとは言えない。

「何かアンバランス」

修一の率直な感想に、少女は肩を落とした。

「そんなあ。折角可愛い格好出来ると思っていたのに……。グス……」

肩が震え、声がか細くなって修一は己が何かマズイことを言ったのだと慌てた。

「あ、え、いや、でもほら、君可愛いし、きつと着物何かを着たらすつごく似合うと思うよ。うん！」

「着物？……グス。でも、このセットにあわないと、思う、の。ほら、設定だって神様だし」

「ほ、ほら日本にだって神様は一杯いるし、八百万の神とか！」

「きもの、着てる、かみさまがいても、グス おかしく、ない？」
「うん、ナイナイ。大丈夫だって！」

寧ろ座敷わらしみたいで可愛いと修一は思った。

「わかった。着替える」

「それがいいよ、着替え……。着替え！？」

着替えと聞いて修一は一瞬思考を停止させた。少女が衣服に手を当てたのを確認すると、慌てて身を翻そうとして、動きが止まった。

光の奔流。少女の体から光が溢れ、空間に光の粒子として流れだす。神々しくも何処か優しいその光に、修一は一瞬にして魅入られ

た。

「えっち」

気がつく少女の衣服は真紅の着物へと姿を変えていた。恥ずかしそうに頬を染めて少女はそう言った。

「え、あ、いや、違う」

慌てる修一をみて少女は口元に手を当てて笑った。

「分かってる。着替えなんて一瞬だし、そもそもエフェクトで素肌なんて見えないしね！」

「う、うん」

泣かされた仕返し！　そう言って笑う少女の姿に、修一は頬を紅くした。

「さて、そろそろ本題に戻ります！」

「本題？」

「あら？　私がどうしてここにいると思っているの？　いささか脱線しちゃったものの、時間が推してるので今からこのゲームの説明を行います！」

なるほど、送られてきた箱の中にゲームの説明書が無いのはこれが理由かと合点がいった。

「このゲーム Genesis Onlineでは、あなた方プレイヤーに神となり人間を導いてもらいます。人間たちはあなた達を神として信仰し、敬うことでしょう。あなたの命令ならどんなことであろうとも言うことを聞くはずです。なんたって自分たち一族を創ったのがあなたなのですから。ですが一つ覚えておいてください。これはゲームです。ですがゲームの中のキャラクター達には各々思考し、意思があります。あなたは、これから生まれるであろう彼ら

人間の命全てを握っているのだと考えてください。考えることができない場合、また、あなた自身の手でキャラクター達を悪意をもって故意に死に追いやった場合、ゲームの参加資格が無いとして、ゲームを強制終了させて頂きます」

それはあまりにも……。

「やり過ぎだと思いますか？ ですが、これは私がこのゲームを許可する上で運営に厳守させた内容でもあります。キャラクター達にも命があるのです。それを無下に扱うような人に、このゲームはして欲しくない」

そう言った少女は何処か悲しげで、何か途方も無い葛藤があるように、修一には思えた。

「ですが、泣いてしまった私を氣遣う事のできるあなたなら、きっとそんな心配をする必要はないでしょう！ 私はあなたを信用することにします」

たったそんな事で信用されても……。そう思うと共に、美少女に信用されるのも悪く無いと、思わず頬が熱くなった。

「さて、ここからは詳細なルール説明ですが……。あれ、ごめんね！ そろそろ時間のようです。まあ実際に遊びながら理解していくって事でいいですね！ それじゃ！」

「え、ちょ、ちょっとまってよ！ そもそも僕こういったヴァーチャルなゲーム自体したことが無いんだけど！？」

「大丈夫！ 直ぐに慣れますよ。そうそう、一つだけ、このゲームのクリア条件の一つは、”世界滅亡まで、プレイヤーが創造した人間一族を生き長らえさせること” それでは行つてらっしゃい」

修一の足元に突如として大穴が空いた。

「ま、これってまさか！」

修一の脳裏にあまりにも古典的すぎる移動方法が浮かんた。そしてそれに置ける扱いの酷さも。

「それでは」

「やっぱいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい」

最大級の微笑みを持つて手を振る少女を遙か上空に残し、修一は絶叫と共に雲の海を超えて地上へ落下した。

創世記 1（後書き）

本作品はプロットも何も無しに書いているため、後々大幅に改訂される可能性があります あしからず

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2434y/>

世界創世ゲーム

2011年11月7日22時10分発行